

第5回 2027年国際園芸博覧会政府出展懇談会 議事概要

■日時：令和6年10月21日（月）13時00分～15時00分

■開催場所：三田共用会議所 ※オンライン併用

■議事

○政府出展の性格付けを確認しておかなければいけない。主催者展示のテーマ館は教養的に非常によくできていると思う。性格付けとして、テーマ館は教養課程で、政府出展は農水・国交省の専門課程に入るというように考えると、整理がしやすいだろう。同じ園芸博覧会内に同じような性格の施設を設けると、互いに無駄であるだけでなく来場者が混乱するだろう。テーマ館の最後のほうで「次は政府出展をご覧ください」と、きちんと案内をつなぐとよい。テーマ館、園芸文化館、政府出展の3施設の展示はワンセットで検討すべきで、ひとつのストーリーで説明できなくてはならない。

○3施設の関係でいうと、政府出展は「落ち着いた空間」という収まりになるのではないかという気がしている。テーマ館が非常にコンセプチュアルで、新しい発見を中心に扱うのに対して、政府出展会場には流頭部が位置し、国土交通省の政策でいうと流域治水の原点、農林水産省の政策でいうとバイオフィリアといった観点を含みながら、どちらかというと落ち着いていて「知っているようで意外と知らないものがあった」ということを所々で発見できるような展示施設になるのではないかと感じている。

○豊かな自然が残る瀬谷の里山地帯で、室内緑化や屋上緑化などをやってもしょうがないと思う。グリーン・エコライフという言葉があり、これまでの懇談会では日本の自然観について相当長い時間議論してきた。園芸文化館でも同様のコンセプトのものが入ってくるのであろう。テーマ館・園芸文化館との違い、コントラストを際立たせる必要がある。この政府出展は、来場者の数を成功の指標とする必要はなく、内容重視の王道路線で行くべき。公園と花き園芸の振興というレベルではなく、もっと広く国民のライフスタイルの中に日本の自然観やグリーン・エコライフが定着するような、あるいは子どもたちの中に日本の自然観を育むような展示とするべき。また、農林水産省では、大変水準の高い農に関する研究成果が蓄積してきている。その一端をまとめるだけでも、もっとインパクトのあるものが出せるのではなかろうか。大阪・関西万博ではメカニカルな未来像が打ち出されるものと思うが、こちらでは、そうした研究成果などで地に着いた未来像をみせることができると考えている。本

日の説明でテーマ館、園芸文化館、政府出展の 3 施設の全体像が見えてきたことで、もう少し地味でもよいから研究成果などに根差した展示とするのがよいと考える。加えて、日本の農林水産業、そして国づくり、まちづくりのすごさを伝えるような資料や情報を世界へ発信する場所にしてほしい。

→単に半年間のイベントとして捉えるのではなく、会期前から会期後までの時間軸をしっかりと持ちながら、政府出展の展示内容について検討を深めてまいりたい。

○例えば、防災というと多くの人は防潮堤からコンクリートをイメージするかもしれないが、農林との組み合わせることで河畔林などエコロジカルな防災は日本の伝統の中にずっとあるものだ。治水・治山と国土開発の知恵は、江戸時代から豊富に蓄積している。スマート農業のような先端的なものもあるし、逆に伝統の中に、今世界に誇るべき国土強靱化につながる思想や技術がある。国土交通省の研究機関では、防災関係あるいは国土保全系の技術研究に長年取り組まれているが、そうした手堅くやっている取組を国民は知らない。地味でもよいと言ったのはそういう意味で、ぜひそういった研究成果を発信していただきたい。

→農林水産省の政策も加速度的に方向が変わってきている。一つは「みどりの食料システム戦略」で、EU やアメリカに負けないように環境に配慮した農業、農林水産業に大きく舵を切っている。先般も、食料・農業・農村基本法を改正し、環境との調和を大きな課題と位置付けている。世界の潮流でもある「みどりの食料システム戦略」の話も園芸と密接で不可分なので、何らかに入れていけないかと思う。また、園芸・農林・水産分野は加速度的に、IT などの様々な技術が入ってきている。5 年前にはほとんどなかったが、稲作でもドローンで農薬を撒くなど一気に変わってきている。少しずつそうした取組みについて認知度を高め、子どもたちの意識にも残るように、前向きなことも発信できるように、全体として検討していきたい。

○会場は里地・里山地帯なので、農村地帯とも言えるだろう。しかしその背後には 300 万人を超える大都市があり、また、市民参加が非常に盛んなところだ。農村の知恵は知らないかもしれないが、環境や農業や自給率などに強い関心を持っている方がいる。首都圏の中でやることの意味はそこにある。

○石破首相は地方創生について盛んに発言しているが、日本のすごさは農村部にあり、それを首都圏のいわゆる都会派のユーザーに見ていただかなくては

ならない。地方創生を掛け声だけではなく、園芸博会場できちんと展開していかなくてはならない。地方では様々に工夫を凝らし地方創生に取り組んでいるが、そうした内容をイベント等で外部に発信していない。ぜひこの園芸博をそうした場にしていきたい。

→政府出展では、実物展示を通じて日本の自然観から昇華された思想と文化を改めて確認し、未来へ再考する機会をつくりたいと考えている。現代社会が直面する諸課題の解決につながる日本固有の自然共生文化と、これを応用した技術体系の一端を将来像として提示することで、この再考と将来性の提示を通じ、幾多の自然災害の経験と、多様な自然計画で生まれ育った精神が培った自然共生の思想と知恵を、わが国の知見として発信していきたい。(公社) 2027年国際園芸博覧会協会(以下「協会」。)で検討されている教育参画プログラムと調整・調和しながら、レガシーとなっていくよう取り組んでいきたい。

○政府出展は教養的なものではなくて、もう一步深堀し、差異化することが必要だろう。例えば、牧野富太郎の植物標本などを展示に加えてはどうかと考えていた。植物学をはじめ、新種の発見などの歴史はそれほど古くはない。そういった標本は大学などが所蔵しているので、ご協力いただき実物を展示してはいいのだろうか。バーチャルの展示が多い中で、標本のようなリアルな展示はよいのではないか。テーマ館で「奇跡の一本松」の根の本物を出すことは、「月の石」にはか敵わないかもしれないが、驚きがある。

○江戸時代の本草学の本を多く収蔵されているところもあるだろう。日本の書籍、図譜でも絵でも、研究に近い農書でも、そういう和綴じの本は、外国人は相当関心を持つと思われ、展示しても面白いのでは。

○「花や緑、農、大地を礎とする日本の将来像の提示」とあるが、いまひとつ日本の将来像が何なのか少し分かりにくかった。今回の園芸博は、農というものが一つ大きな特徴ということであったが、農や農的なものがどこまで入っているのか。例えば都市計画などの中に農的なものが入れないのか。農的なものを都市計画の中に入れ込み、主に都市に住む人々の暮らしに何か提案ができないだろうか。例えば、「今の時代に即した農の風景を庭園で表現」と書いてあるが、今の時代に即した農の風景とは何なのか。それを都市計画に入れ込むことによって、人々の暮らしに何か新しいものを提示できないだろうか。

- 会場の風景は、まさに「幸せを創る明日の風景」で、多分会場全体で農の風景を組み込もうとしているのであろう。横浜市では、菜園付きの都市公園など、農のある暮らしのようなことは既にやっているのもう少しやるのであれば、学校教育など、新しいプログラムを入れていただくことなどを期待する。
- 現代の暮らしの中から農というものは非常に乖離しているのが現状だが、土を通して取り戻すというのは、一つあるのかなと思う。
- 格差社会になり、この園芸博会場に来られない人の方が圧倒的に多いと思われる。小中高の子どもたちが、リモート参加でも何らかの方法で会場に来た感じがするような工夫が必要だと強く感じる。その辺を少しご配慮いただきたい。イマーシブなものというのは、既に新規性がなくあまり驚かれるものではない。従って、リモートから見られるコンテンツをどれだけリッチにするかということ、ぜひ文部科学省と一緒に進めていただければと思う。
- もう一つ教育面では、「七五三」と言われており、小学校、中学校、高校になると、7、5、3で、授業についていける数が減っていく。小学校はみんなついていけたけれども、高校になるとほとんどついていけないというのが現状の時に、やはり重要なのは小学生で、小学生にどれだけの夢を見せることができるかがポイントとなるであろう。
- 今の農学部では、花あるいは作物を植えるということや、スマート農業で格好いいロボットを創るということにも取り組まれているが、大きな変化としては、やはりライフサイエンスに目が向けられていることだ。CRISPR-Cas9のような発明が次の農業の国家としてのパワーをつくる。ゆえに、そういった発明にもう少し目を向けていただけないかと感じた。
- 最後に、政府出展で訴えるべき危機感というか、国家として何を考えるかについては、気候変動やプラネタリーバウンダリーだけではなく、ウクライナ危機が挙げられるであろう。農水省にとってファーストプライオリティーはやはり食料安全保障であり、ここの訴求として、ウクライナ危機によるサプライチェーンへの影響が深刻であること、肥料の重要な成分であるリンをどうやって確保していくか等について、国民に訴える展示をぜひ実施いただけるとありがたい。
- この点については、教育のプログラムや、広くいえば生涯学習のような話である。今のウクライナの問題は食料問題であり、ウクライナの国民の多くは、彼らの国土には肥沃なチェルノーゼムという土壌が分布しており、それによってウクライナが小麦の大生産国へと発展してきたことすら知らないという現

実がある。こうした教育プログラムは、単に会場で実施するイベントではなく、何年も掛けて様々な機会、媒体を使ってやってほしいということを伝えている

○自給率の問題は最大の課題だ。自給率に着目すれば、本当の農業、農村の現実が出てくる。それを国民、特に小学校に伝えなければいけない。農業を取り巻く全体像は、実際は学校教育や家庭教育、社会教育でも必要だ。

○しかし今一番忙しいのは誰かという、子どもなのだ。かなり前もってネゴシエートしておかないと、子どもの時間を確保するのは困難だ。だいぶ前に申し上げたつもりだったが、まだ進んでいないようなので、もう少しご努力いただきたい。私はいくらでもご支援申し上げたいと思っている。

→食料安全保障の問題は、我々も非常に大事だと認識している。文部科学省とも、連携しながら、例えば食育の観点なども絡めながら、副読本を作るなどの取組を実施している。引き続き、委員のご意見を踏まえながら対応していきたい。

○大変安心したが、こういうイベントをリモートでどう伝えるのかは、何か考えられるとよいだろう。

○リモートでどのように園芸博を伝えていくかというのは、なかなか難しい。協会としても、新しいデジタル技術を活用し、テーマ館でどのような情報を伝えていくか、また、園芸博の開催前にどのような情報発信ができるかなどについて多面的に考えている状況。

○もう少し国としての危機感を打ち出してもいいのではないか。開催までの準備期間は約 2 年半しか残っていないので、あまり展示内容を変えていくこともできないだろう。基本的に今回お示しいただいたものを深掘りしていき、これを大きく変えるようなことはやめたほうがいいと考えている。来年の 3 月には大阪・関西万博が開催され、この園芸博は大阪・関西万博の開催前に様々な情報発信をすべきであると考えている。

○最後に是非お願いしたいのは、1990 年の大阪花の万博では、政府出展という形で、まさに花の万博を象徴するような、世界最大の花であるラフレシア、あるいは農水省にご協力いただき屋久杉の根株といった、話題性のある展示があった。政府出展には、訴求力や話題性のある展示を入れていただきたい。農林水産省の研究所には、今までどこにも出したことのない貴重なものが必ずあるはずで、そういうものを探し出していただくのはどうだろうか。宮内庁の

盆栽を初めて皇居の外に出して展示することが可能であれば、それを6回、1カ月に1回ずつ展示替えをして、その時に来ないと、その展示物は二度と見られないというような見せ方していただけないかと思っている。ほかには、ツンベルクが日本に来た時に植物採集をしたが、この標本がスウェーデンのウプサラ大学にあり、日本に来たことはないと思う。こういうものが少しあるだけで博覧会の価値が違う。話題性が出ると思う。

- 日本の自然への畏敬の念というものを取り上げている点は、非常に重要なポイントだ。畏怖や畏敬は、人間が自然をコントロールするのではなく、自然の中に人間があるという、哲学的な思考の中から生まれてくると思っている。そうしたことを、もう一步深めて学習できるようなことをご検討いただきたい。「ああ、すごい」というだけでは、なかなか畏怖、畏敬の念にはつながりにくい。例えば、そういった日本の自然観に関して書かれているような著作物など、もう少し深掘りして学びたい人へのコンテンツが整理されているとよいだろう。
- ぜひ日本らしい循環マインドを世界に示したい。1点目は、「もったいない」が国際語になったが、そういうものを具体的に示したい。工事で伐採した竹林や木材、会期中に発生する古い切り花などをリユース・堆肥化すること。もう1点は、特に若い人、高校生、子ども連れの若い親御さんや海外の方にイノベーションの発端になるような気付きを意図的に持たせたい。ジャストアイデア的だが、高校生連携の花壇やハウスは、動線的にも足が運びづらいかもしいないので、そこまで足を運んでもらうような工夫として、世界的に人気のある日本が誇るアニメや漫画、また伝統的な日本の春の七草や秋の七草というものと関連させるということもよいのではないだろうか。
- 全体の仕立てとしては、分かりやすくなったと思う。あとはできる限りの工夫をしていただけると素敵になるかなと思う。

欠席の委員の方からの意見を紹介

- 屋外の春から秋の景観をどう見せていくか、またフィナーレの飾り方について検討が必要であるという中で、秋の提案が少なく春に偏っているように見える。季節ごとに見所があると、何回も会場に来てくれるのではないかな。
- 来場者、植物も疲弊する夏の暑さ対策、スタッフの安全についても検討が必要。
- サクラについては、寿命が短く、いずれ切らなければいけない性質の樹木である。そのはかなさをうまく諸課題とつなげていくことで、サクラの性格を

表現できるとよい。

○植物残渣についても、コンポストを設けるなど、循環型の取組を見せられるとよいのではないか。

○建築物に関して、金属屋根や木材は再利用していただきたい。特に金属屋根は、そのまま外せるようにすると建物の個性にもなるのではないか。

○釘を使わないことを外国人の方は日本らしさと考えている。釘を使わないというわけにもいかないので、見せ方をうまく工夫すること。

○日本の自然観という中でトラス構造などは洋物に見せない工夫が必要だ。特に舞台の下のブレースについても同様である。回廊の形状についても、うまく周辺とマッチしたような意匠を検討していくことが必要ではないか。

○現在、心の庭、里の庭、山の庭、農の庭などと呼んでいるが、これはあくまでも仮の名称である。こういう名称を仮に付けてみて、植物の選定や、遠景を見せるか近景で収めるかといった視点場の検討、農の問題の切り口を生産学的あるいは、生活的、生命を感じさせるものとして扱うのか等を決めようとしている過程だ。これが庭園の各箇所名称になるものではないとご理解いただきたい。西の館や東の館も、おそらくこれからまた名称を変えることになるかと思う。

○テーマ館と園芸文化館と政府出展の関係性を、もう少し来場者に分かりやすく伝える配慮や知恵が必要。

○テーマ館、園芸文化館、政府出展の検討はそれぞれ並行して実施されていたので、ようやく現在全体像が見えてきた。各施設のメリハリをはっきりさせ、また連続性も考えなくてはいけない。そこをこれから詰めていく必要がある。併せて、ネーミングについても調整が必要になるだろう。

○園芸博へのリモート参加については、本格的な検討はこれからとなる。園芸博の記録として残るような発信がどうすればできるかを考えたい。

○昭和記念公園の昭和天皇記念館には、植物や昆虫の標本がある。あるいは牧野植物園の記念館に何かお借りできないだろうか。それらの展示を通して生態系あるいは生物多様性への議論につなげつつ、展示の話題性に持ち込めたらよい。その際、春の話題と秋の話題という、2つの季節の話題を意識してピックアップするようなことも考えられる。

○現物のすごさというのはあると思う。バーチャルな映像の話ばかりをしてい

るが、農というのは基本的に本物、つまり実地での営みなので、それを映像や音楽だけでやるというのはよろしくなく、特に政府出展では、もう少し本物で攻めるとよいだろう。

○テーマ館で土中環境や植物の展示をご覧になった来場者が、政府出展でその実物を見るという場にしたいと思う。例えば、菌根の話は、今造園の第一線でも菌根を使いながら植栽をしたり、樹木の治療をしたりしている。そういった情報を発信できれば、テーマ館で学んだことが実際の世の中で本当に生かされていることを実感できる仕掛けがつくれたらよい。

○今の時代の日本に、果たしてどういう庭がふさわしいのかと考えたとき、やはり風土・環境に根差し、里山、自然との共生した庭というのが、一つのテーマになる。里地・里山をつくった農民の技術が作庭の始まりであり、水を引き込み、堀をつくり、堀をつくり、防風林をつくってきた営みが、造園技術や庭園文化と発展し、植木屋がそれを継承してきた。そうして培われてきた日本の伝統技術を使い、植生や湧き水の状況などを調査しながら、今の時代にふさわしい日本の庭を発信できたらと考え取り組んでいる。

○博覧会として、外国人のための通訳のシステムや解説はどうなっているのか。政府出展で造る庭はナチュラルで素晴らしいものであり、目視情報での説明は、デザイン上好ましくない。しかし、耳から入る音声情報で展示に込められた日本人の知恵がしっかりと伝わらなければならない。

○前回の懇談会後から、政府出展でどのように危機感を訴えるべきか考えており、政府出展会場に位置する和泉川の源流を見てもらうことが重要で、特に子どもたちにとっての危機感のセンサーは生き物だと感じている。和泉川の源流部には、アメリカザリガニ、コイ、カワニナ、横浜メダカ、ホトケドジョウなどが生息しているが、子どもたちはこうした生き物とのふれあいを通して、環境への興味を抱くとともに、環境の変化や生物多様性の喪失に対する危機感を実感するものだ。

○横浜市には、園芸博の開催によって環境が変わってしまうのではないかと不安をお持ちの方もいると思う。園芸博の開催によって自然が一度変化するかもしれないけれども、ネイチャーポジティブに資する整備を行うことで、また自然が再生していくのが政府出展なのだというところを見せていくことが必要。やはり学びの部分が大事だと再確認した。

○現在小学校との連携について戦略を練っている。小学生たちが学んだ知識を持ち帰り、自分たちの学校もきれいにしようというところまでつながればよ

いだろうと考えている。我々が出前の講座を行う、あるいは先ほどオンラインの話もあったが、そういったものを使い、どんどん波及していきたいと考えている。

- そういった小学校との連携は早速来年から実施するべき。
- 会期中だけではなくその後も取組が継続するよう、この園芸博は会期前からの活動がものになっているということが見せられれば大成功だと思う。
- テーマ館、園芸文化館との展示のすみ分けについて整理している。テーマ館は、どちらかというと地球規模で、時間軸も長い中での植物と人類の役割や関係など、科学的な整理になっている。伝統園芸館は、江戸時代の日本の園芸の基礎となった部分、江戸時代の園芸ブームから始まって明治ごろまでを取り上げ、細かくつくっていると伺っている。政府出展では、科学などではない、日本の自然観という日本人が脈々と自然と付き合ってきた中で培った経験値や習得してきた自然との付き合い方などを示していく必要があると考え、展示を検討している。
- やはり実物展示が大事であり、園芸博では一般には公開されていない価値のある盆栽をお見せできるよう調整している。園芸博ではそうした盆栽が目玉として見られることを発信していきたい。
- 多言語化については、協会での検討と調整しながら、政府出展としてもそれに準じた形で対応する。また、デジタルを活用した様々なプログラムを実施し、会期前、会場外から参加いただける方策を考えている。会期中の展示との連携については現在検討中である。
- 世の中のシステム自体が変わらないと、自然共生の方向大きく転換するのは難しいと思っている。それは、エコバッグの普及というような次元の話ではなく、今の世代の人たちが、自然や環境に対してきちんとしている企業や政治家を支援するような発想につながるような、細かい行動というよりは、思想及び考え方の変容をもたらしたい。

以上